



企画展示のご案内

<パネル展>「明治国家建設者の書跡—大久保利通・伊藤博文・大隈重信—」

憲政記念館では企画展「憲政記念館ふりかえり展」のサブ展示として、2021年（令和3）2月24日（水）から6月29日（火）までパネル展を開催しておりますので、ぜひご覧ください。

館蔵資料のうち、明治国家建設の立役者となり、我が国の近代化に向けて尽力した実務派の**大久保利通、伊藤博文、大隈重信**の書をパネルで

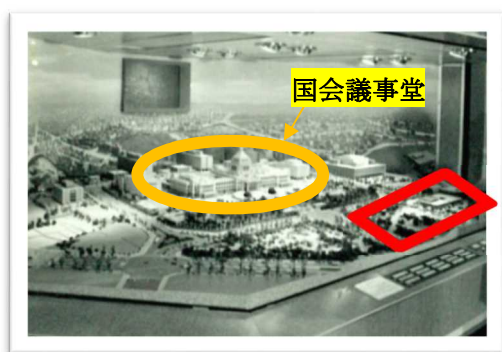
紹介しております。また、人物像を伝える錦絵も併せてパネルで紹介しております。



<2階壁面展示の資料紹介>

2階展示室では引き続き企画展示「憲政記念館ふりかえり展」を開催しております。壁面ケースには、開館当

初展示してあった「国会議事堂模型」の一部分である憲政記念館の模型を展示しております。開館当初の白い時計塔をぜひご覧ください。



開館当初の国会議事堂模型



現在展示中の憲政記念館部分の模型

当時の模型は国会前庭、議事堂敷地内、国会図書館、衆参の議員会館まで含んだ映像つき
の一大パノラマ模型でした。

もう一つの議会史～国会職員オーラルヒストリー～Ⅱ
大八木 とし子さん（その3）

前号では、大八木氏が衆議院事務局に入り、速記士補を経て速記士になった新人時代と速記者の出番のある日の1日について掲載しました。

<大八木とし子> (おおやぎ・としこ)



昭和43年10月から衆議院事務局記録部で勤務。平成10年4月速記者養成所副所長、平成16年7月記録部第一課長を経て平成20年3月に記録部副部長を最後に退職。

【主任速記士】

○大八木氏 4年目には主任速記士試験がありまして、それで主任速記士になるということです。

お給料が上がったりするんです。だから、主任速記士に通って初めて一人前っぽい感じになるのかな。

—— ああ、そんな感じですか。

○大八木氏 気持ち的にはね。その後は試験がないわけだから。

—— 4年なので、やはりその辺ぐらいになるとようやく自分も速記者だぞという…

○大八木氏 そうです。だから、その試験の前は、練習をして備えるわけです。

主任速記士になればいつでも主にはなれるという資格はあるわけですがけれども、実際にはすぐ主になったわけじゃなくて、組合せでも、たまたま主が風邪を引いて休んだりして、忙しくて組数を確保したいというと

きには、主になってちょっと出てくれないかというようなことで主になることもありましたがけれども、でも、正式な組としてはまだ副のまま、あと4、5年は続く。

—— 平均的に言えば、主任になって4、5年は副…

○大八木氏 新人になってから、通して10年近い間は副でした。というのは、後からお話ししますけれども、やはり上が詰まっていると上がらないわけですよ。

【女性の速記監督昇格問題】

○大八木氏 これは部内の問題になりますが、昭和46年、1971年に女性の監督昇格問題というのが起きました。それまでブロック長というところまでは皆さん行っていたんですけども、女性のトップの方がちょうど監督に昇格する時期¹になったのに、7月で外されちゃったんです。

それはやはり女性たちはショックを受けて、副部長に説明を聞いたり、部長との懇談を持ったりしました。女性たちだけの集まりの「みどり会」という会があったんですけども、やはりその人たちで…

—— つまり、女性の速記者の人たちの親睦会みたいな形ですか。

○大八木氏 そうです。親睦会であ

¹ 当時、男性は概ね40歳代前半頃に速記監督になっていた。

ると同時に、予算要求するときや部内の問題を話し合うところです。

—— 若干組合色がありますね。

○大八木氏 女性がブロック長になるときも、命令があれば深夜勤をしますということを決めていたんですけれども、それ以上の人の深夜勤については何も決まっていなかったんですよ。監督昇格すれば議運担当になるのですが、そこを経て校閲に上がっていくところだったんです。ですから、その議運担当になる女性については命令があれば残りますよという…

—— ごめんなさい。議運担当というのは、順番からすると、主任になってブロック長に…

○大八木氏 副監督になってブロック長をやって、それで次は監督に昇格して、監督に昇格すると議運班になる。議運班というのは、そのころはそこだけが、専門化されたセクションだったわけです。そこに行かれなかった。ブロック長のまま置いておかれて議運班に行かれなかったということです。

何回かの話し合いの末、10月時点で議運班に移行するという収拾案で決着したのですが、みどり会では、そういうふうには議運班になれば命令が出ればもちろん深夜勤もしますよということでもとまって、部内総会という組合的な総会があるんですけども、そこでもそれが決定されていきました。

翌年の7月に、無事にその人は監督に昇格しまして、女性たちは本当にほっとしたわけです。

—— たまたまその人が外されたというのではなくて、速記監督には女性はそれまではなっていなかった。

○大八木氏 とうか、いなかったんです。

—— ああ、いなかった。女性が入り始めた最初ということですか。

○大八木氏 そうです。

—— 速記監督と議運班の関係なんですけれども、速記監督は各委員会にいると思うんですけれども。

つまり、速記監督というのは議運班だけじゃないですよ。

○大八木氏 議運班を経て校閲になっていくわけです。

—— 校閲になるためには議運班を経るというイメージですか。

○大八木氏 そうです。

【公務災害】

○大八木氏 それで、昭和47年に主任速記士になった翌年、田中角栄内閣が始まります。第71特別会²、それが通年国会と言われる国会になりました。最初、65日延長して、更にまた65日。ですから、計130日延長された。そして毎日の出番回数が7回、8回とみっちり審議をするものですから、速記者の疲労は蓄積されて、身体の不調を訴える人がたくさん出てきました。特に再延長された6月以降は、故障者が続出してくるわけです。

それはどういう状態かという、右手がしびれてお箸も持てないとか、右の肩、腕が激しく痛んで上がらなくなる、いわゆる頸肩腕（けいけんわん）症候群というものです。8月

² 昭和47年12月22日に召集。当初会期は150日間であったが、5月と7月にそれぞれ65日間延長され、会期は昭和48年9月27日までの280日間に及んだ。

の時点では、もう病休者が12名、つまり現業の1割です。そのうちの4名は転地療養に入られたりして、大変でした。

新聞もこれを取り上げて、国会後半はもう片翼飛行だったというふうには、そのときの福水部長の談話が出ていました。

組合³もこの問題を重視して総長交渉を持つなどしましたが、総長ももちろん心配されて、慈恵医大で、現業速記者全員の特別健康診断というのを実施しました。その結果、頸肩腕症候群にかかった方は全員公務災害と認められたのです。

でも、それをきっかけにおやめになった女性も多かったんです。私の同期も女性はあと2人いたんですけども、2人とも頸肩腕になってしまって、治癒はしたけれども、子育てのこともあったりして結局おやめになった。優秀な人材がやめていかれたということは本当に残念なことです。

だから、同期では女性は私だけにこの時点でもうなってしまった。

—— 治癒する方もいれば、治癒されない方もいたんですか。

○大八木氏 治癒ではなくて寛解でしょうか。しびれ感や痛みは続いたみたいで、完全な治癒ではないですね。

—— その後は、現業の方も何とか復帰できた方もいらっしゃったんですか。

○大八木氏 その人は男性でしたけれども、シャープペンを太いスポンジとか巻いて手に負担がかからないようにして書いたとか、そういうい

ろいろな工夫もされたんじゃないでしょうか。だから、全く完治にはならないのですね。

—— 速記者として現業を続けられた方もいらっしゃるということですよ。

○大八木氏 はい、いらっしゃいます。でも、ほとんどの女性は、ほかの理由もあって結局おやめになりましたね。

—— ああ、そうですか。

手が動かさなくなるというのは、手を使い過ぎるとなるんですけれども…

○大八木氏 腱鞘炎（けんしょうえん）、それはよくあります。

そういう伏線もやはりあったと思いますよ。だから、別に頸肩腕だけじゃなくて、腱鞘炎で悩んでいる人も結構いました。

—— これは通年国会で、すごく忙しい。それがさっき言ったところまで悪化しちゃったかもしれませんけれども、腱鞘炎というのはそこそこなるんですか。

○大八木氏 なった方がいます。結構重いのになつたということです。

あと、復帰しても丸々皆と一緒に働けない状態で、軽勤務というのが続きました。軽勤務といっても、超勤はできないということで、様子を見ながら1日2回か3回限度で出番に出るという感じです。

—— 超勤させないという軽勤務ですよ。

○大八木氏 そうそう、そういう軽勤務です。だから、普通には働くのよね。

—— ただ、そうすると、超勤さ

³ 衆議院職員組合

せないとなると、今度は速記者の方でいえば、出番の回数のある種の制限の方になってくるわけですね。

○大八木氏 そうです。

—— 深夜国会とまでは言われなくても、定時に帰れるような…

○大八木氏 ような時間配分で出番に出る、そういうことだったと思います。

でも、それからは記録部全体で、速記者の特別健診が定期的に行われるようになって、再発予防の健康管理策がとられています。

普通の通常会はそのころは2,000時間弱ぐらいの審議時間だったんですけども、このときは3,000時間を超えていたわけなんです。そのぐらい忙しいからみんな頸肩腕になっちゃったわけです。こういう苦い経験をしましたので、翌年の通常国会⁴からは、繁忙時には養成所の生徒にも応援を頼んだり、OBの方も4人ぐらい呼んで、それで応援速記をしてもらうという対策をとることになりました。

【テープレコーダーによる録音】

○大八木氏 それともう一つ、翌年の臨時国会⁵からは、全委員会に録音機が導入されました。実は、それまでも本会議とか予算委員会はひそかに録音はとっていたんですよ。ですけど、今回はもう全委員会にカセットのテープをつける。

—— 最初はオープンリールですか。

○大八木氏 いや、カセットテープ

です。あと、自主操作です。何本か与えられて、そのカセットテープを持って、委員室に置いてあるテープレコーダーのところに入れて、着脱は自分でやって帰ってくる。

頸肩腕症候群の問題が起きたということが、職場に大きな変化をもたらしたということです。応援速記が始まったことと、全委員会に録音機が導入されたことですね。ただ、今度、テープをとると、速記者同士の読み合わせというのがなくなるわけです、録音を聞いて照合していくので。そこで、私が一番懐かしいと言っている読み合わせがなくなっちゃった。

だけど、テープが入るということは、速記者にとっては、符号が読めなくなっちゃうから早く訳さなければという心理的な負担からは解放された。

—— 精神的には楽になった。

○大八木氏 精神的なあれはすごく大きかったと思います。

それから、聞き取れない箇所が、テープを何回も聞くと、ああ、こういうふうには言っていたんだということがわかったりして、問合せ⁶をしなくても済むこともある。逆に言うと、ああ、もうテープに入っているからいいやと思ってそのままにしておいて、訳してみたら、あっ、何かちょっとここは意味がおかしいやと慌てて問い合わせるとい感じで問合せが少しおくれぎみになっちゃったというようなデメリットもありました。でも全体としては、誤聴がな

⁴ 昭和49年の第72回常会

⁵ 昭和49年の第74回臨時会

⁶ 発音が不明確だったり、表記に迷うとき発音者に聞くこと

なくなったとか心理的な負担が軽くなったという大きなメリットがありましたね。

【ロッキード事件】

○大八木氏 あと、1976年、昭和51年にはロッキード事件が起きます。

ここからはもう本当に個人的な話になるんですけども、この事件が起きたのが2月なんです。そのとき、第1子が生後10カ月だったんですけども、風邪を引いてしまいまして、そのウイルスが股関節に入ってしまったって緊急入院して、長期治療が必要だと宣告されちゃったんです。2月ですので、予算審議本番の季節で、総括質疑が終わって分科会⁷に入るとか、そういう時期だったんですよ。

このころ、看護休暇とかそういうような制度は全くありませんでしたので、この最繁忙の時期に働けないということは、もう退職しなくちゃいけないかという気持ちになってしまって、慌てて運営⁸に、こういう事情になりましたということを電話したんです。そうしたら運営の方から、今大変な問題が起きちゃって、委員会が全部とまっちゃっているから出番の心配はしなくていいですよという答えが返ってきたの。

—— そっちの方ですか。

○大八木氏 そっちの方だったの。

私、ええっとびっくりしちゃって、それがロッキードの始まりの日だったんですよ。とにかく全部ストップですからとおっしゃるんです。

それからずっと、時々集中審議⁹とかいろいろなことはあったにせよ、ほかの委員会は全部流会してしまうし、空転が長かった。それに助けられましたね。子供は4月半ばに退院するんですけども、2月の初めから4月半ばまで、私はずっと病院から役所に通うという生活をしました。それが物すごく印象的です。

もちろん、運営とか主がいろいろと配慮してくださったことにはとても感謝しています。ですけど、やはり、異例づくめの国会でなかったならば本当に乗り切れたのかどうか。ちょっと私も運がいいのかなと思いました。

ロッキード国会はそういうことで過ぎてしまったんですけども、国会の終わりごろに、ロッキード問題に関する調査特別委員会というのが設置されて、閉会中になってから、7月に児玉誉士夫氏に対する臨床尋問¹⁰というのが行われました。

末永雅子さんという女性の速記者が委員長と随行して速記をとりました。これは大分話題になりましたね。末永雅子さんは凛とした方で、私にとっては憧れの女性速記者でした。

—— お1人しか行かなかったん

⁷ 衆議院予算委員会は、総予算の審査の場合においては、分科会に分けるのを例とする。分科会における予算の審査は、各省庁別に細目にわたる質疑を行う。分科会の数については特に定めはなく、近年は8分科会に分けるのが例であるが、1970年代（昭和40年代後半から昭和50年代前半）は4分科会又は5分科会に分け、4ないし6日間行うのが例であった（昭和51年度は例外で1日間）。分科会を開いたときは、委員会の例にならない、その会議録を作成する。

⁸ 本会議、委員会で速記する出番を管理する部署（前号参照）

⁹ 委員会で、多くはその時期に問題になっている特定の国政テーマに関して質疑を行うことを集中審議と呼んでいる。

¹⁰ 昭和51年7月21日（第77回国会閉会中）のロッキード問題に関する調査特別委員会において、病気のため同委員会に出席できない証人児玉誉士夫氏の自宅に委員を派遣しロッキード問題について調査を行うに決し、翌22日田中伊三次委員長を派遣し、同証人の自宅において調査を行った。

ですか。いや、4人というわけには
いかないかもしれませんけれども、
1人というのもこれまた。

○大八木氏 そうですよ。ちょっと
えっと思いましたけれども、そう
なんです。やはり、そんな広いと
ころじゃなかったということもある
んでしょうか。本当に魅力的な女性
の先輩が多くいらっしゃいました。

【速記副監督】

○大八木氏 そうこうして、今度は
副監督になります。昭和57年、1982
年7月です。副監督になればブロッ
ク長にもなれるという位置づけだ
とは思いますが、ちょうどその
前の年に、科学班とか法務班が
やっとできたんです。それまでは
上が詰まっていたので主になるのが
とても遅くて、副監督になる1年ぐ
らい前から主になったんです。だ
から、ブロック長はまだまだ先と
いう感じです。

その後、副監督の間に組合に執行
委員として出たりしましたし、養
成所の方にも行きましたので、主
の期間というのはちょっと短かっ
たんです。ちょうど折り返しのあ
たりで組むわけですから、期の
近い人ばかりで…

—— ああそうですね。1番上と
1番下が、その次と2番目と組む…

○大八木氏 そうです。だから、隣
の期の人と組んだりするわけです。

—— そうすると、主になる直前
だったら主は近いし、逆に、自分
が主になった直後だと近いところ
で…

○大八木氏 そうそう、そういう
ことです。だから、本当に期が
近いか

ら心安い方とばかりで、楽しく
仕事をしました。

それで、女の人と組んだとき
なんかは、質問する委員のネク
タイの品定めをしたり、そんな
ことを、楽しんでいました。

【女性課長誕生への動き】

さっきも言いましたように、副
監督の時に組合に出ることにな
りました。

婦人部長だったものですから、
その関係でいうと、その2年ほ
ど前に女性差別撤廃条約が発効
したので、国内では男女雇用機
会均等法に向けての動きがす
ごく活発になっていた時期だ
ったんです。それで、「婦人部
ニュース」という機関紙を毎月
のように発行していたんですけ
れども、それもこの動きに刺
激されているいろいろ書いた
という記憶があります。

それから、参議院、衆議院、
国会図書館の3単組が集ま
って国会職連をつくっていま
すけれども、そこにも出さ
せていただきましたので、参
議院、図書館の方々とも知
り合えて、その後の職場人
生にも大きな財産になった
なと思っています。

私が婦人部長をやるちょっと
前に雇用機会均等法の動きが
あって、やめた後の昭和59
年に女性課長が誕生して、
その次の年に雇用機会均等
法が成立します。法律が昭
和61年なんですけれども、
その施行される前に養成所
の募集要項から「女子若干
名」がようやく消えました。
だから、やはりこの社会の
動きと無関係ではないとい
うことですかね。

(以下、その4に続く)

※ 衆議院の速記については、YouTube 衆議院事務局チャンネルにある「【衆議院記録部】国会の速記」
(https://www.youtube.com/watch?v=_Q2xD9SycAI) でご覧になれます。

庭園散歩

<国会前庭の花木>

新憲政記念館の工事区域には多くの花木があり、現建物を背景に見られるのは今年度限りとなります。今号では春の花を紹介します。

まず白梅は2月頃に咲きだし、1階展示室東面のカーテンを開け、ご来館の皆さん方にも見ていただいていた。バラ科の植物だけあって、とても甘い香りがします。

サクラは、昭和42年以来、「日本さくらの会」により記念植樹が行われ、花の色や形も、開花時期、枝ぶりも様々な多くの品種が植えられています。早いものは2月初旬からほころび始め、遅いものは4月下旬まで楽しめます。

団体休憩所奥の安行桜は3月が盛りです。大雪で枝折れしてしまいましたが、濃いピンク色の花が競い咲き、蜜を求めて多くの小鳥が集う姿は、強い生命力を感じさせます。

また、団体休憩所手前のモクレン科のヒトツバタゴ（ナンジャモンジャ）は白い花が人を集めます。

5月には尾崎行雄ゆかりのハナミズキも彩られます。

見納めとなる美観をお楽しみください。



【会議室北側から望む白梅】



【建設中の新館風景】

昭和46年4月28日撮影（建物東面）



【会議室南側の安行桜】

【発行人】 山本 浩 慎
【編集責任者】 高橋 和 彦

【印刷・発行】 衆議院事務局 憲政記念館
〒100-0014 東京都千代田区永田町 1-1-1
TEL : 03-3581-1651 FAX : 03-3581-7962



本紙について、私的利用・引用等著作権法で認められた行為を除き、無断で改変・転載・複製を行うことはできません。引用される場合には出所を明示し、また、転載等を行う場合にはあらかじめ当館へご連絡ください。